

◇「全体主義の克服」

(マルクス・ガブリエル/中島隆博著、2020年、集英社新書)

今売れっ子の若き哲学者マルクス・ガブリエルさん(40歳)と東京大学東アジア藝文書院院長の中島隆博さんの、対談を中心とした新書。「全体主義の渦の中に、再び世界は巻き込まれようとしているのではないか。日独ともに哲学は、20世紀の全体主義に加担してしまったが、では次なる全体主義の台頭をいかに阻止すればよいのか。」がテーマとなっています。グローバル時代のなか、トランプ政権やプーチン政権に代表されるように、多くの国で国家ファーストが露骨になり、いろいろな形で全体主義的な様相が強くなってきているのでは、と感じるのは私だけではないでしょう。コロナ禍で、人々の行動を規制・自粛させるべく、全体主義的発想にその根拠を与えより一層強くなっているように感じます。

またデジタル社会の進展は、多様性を育む面もありますが、情報が取れんする仕組みが強化され、うっかりしていると何がフェイクニュースで何が真実かが分かりにくくなっているように思われます。その行き着く先を「デジタル全体主義」と呼ぶ人もいます。全体主義をどう考えるか、どう回避するかは、おそらく今日の大きな検討テーマと思われれます。

この本は、新書版で概ねは読みやすく、二人の哲学者の本音やストレートな語り口があり、哲学分野でない我々にとって哲学の世界がのぞける大変面白い本です。哲学の世界での人間模様も覗き見ることもできます。ところどころ、哲学の素養を必要とする箇所がありますが、そこは私は適当にスルーしました。哲学と先端的物理学との話も出てきます。現代を生きる哲学者はそのように考えるのか、と興味深く読めます。「大学における官僚主義的な悪」、「複合」のプロジェクトとしての大学、「新しい世代へのメッセージ」と言った項目もあり、今の私の仕事に絡めて興味深く読むことが出来ました。(2021年3月1日記)